

# 被災地派遣レポート＜第124回＞

福祉保健局指導監査部指導調整課

石川 真広さん

## 1 担当業務の概要

私は、岩手県復興局総務企画課協働担当に配属されました。実は幼少の頃、10年間近く岩手県に住んでいたこともあり、東日本大震災後、育った土地に対して何か手助けをしたいという想いが募り、念願叶っての派遣でした。

私の担当業務は、復興関係の広報・情報発信及び他団体との連携全般でした。

具体的には、「いわて復興だより（紙面版・Web版）」の発行、県の復興に係る講演資料の調製、復興局ホームページの更新に加え、復興イベントの後援等他団体からの提案に係る相談受付等を担当しました。



震災前は県の講堂として利用していた復興局の執務室

## 2 業務の遂行に当たって、苦労したこと、工夫したこと

### (1) 「いわて復興だより」発行業務

担当業務で一番苦労したことは、県の復興情報紙「いわて復興だより」の発行です。前年度の予算要求により、今年度分の同紙発行業務委託予算が確保できていたのですが、前任者である県職員が多忙だったためか、今年度の委託業者や委託の仕様等を決めずに異動されてしまいました。そのため、着任後間もなく、委託業者選定の事務を進めると同時に、月2回発行している同紙の記事ネタ探し及び編集に奔走することとなりました。

慣れない他自治体での細かな慣例等もある中、なんとか契約へこぎ着けたものの、委託業者の業務が軌道に乗るまでの期間はずっと四苦八苦していました。ただ、苦労した分だけ愛着がわき、少しでも多くの方に読んでいただくべく、都庁の「全国観光PRコーナー」へ周知のためのチラシを置いてもらえるよう交渉するなど、1年間「いわて復興だより」を育てることに尽力していました。

### (2) 県の復興に係る講演資料の調製

次点としては、県の復興に係る講演資料の調製があります。これは、係長級から知事に至るまでの方々が、復興関係イベント等で講演をする際のパワーポイント資料を調製するというものです。資料の調製に当たっては、様々な部署が持っているデータを集約して掲載する必要がありますが、当初は、県の組織構成も理解していない状況。必要なデータをどの部署のどの担当が把握しているのかが分からず苦労しました。



調製した講演資料の一部

また、着任当時の復興局長（上野副知事[現：財務省理財局次長]）の講演資料を調製した際には、副知事室に呼び出されマンツーマンで指示を受けたり、休日に電話で資料修正の指示を受けたりすることもあり、幹部でありながら、ときには末端職員にも直接指示を出すという仕事のスタイルには、苦労もありましたが大変刺激になりました。

## 3 うれしかったこと、やりがいを感じられたこと

(1) 「いわて復興だより Web」の公開とこれをきっかけとした「つながり」

「いわて復興だより」の発行業務において、私が着任してから大きく変わった点があります。それは同紙のWebサイトである「いわて復興



企画段階から携わった

「いわて復興だより Web」

だより Web」を作ったことです。これは、元々は業者選定の際の企画コンペにて、業者が提案したものであったのですが、これを作ったことで、県の復興関連の情報発信に広がりが見られたように思っています。

Web 版の立ち上げに際し、どんなコンテンツを設けるか、デザインはどうか等、委託業者及び県の関係者と何度も意見をぶつけていく中で様々なアイデアが生まれました。中でも、Web サイト上に Facebook の「いいね！」ボタンと twitter の「ツイート」ボタンを追加したことは、「いわて復興だより Web」の周知に一役買ったのではないかと思います。実際に、取材させていただいた方々や団体等が、それぞれの Facebook 等を利用して「いわて復興だより Web」を情報拡散していただき、その情報を読んだ方が Web サイトを訪問していただける例もあるようで、波及効果を生むきっかけとなりました。

結果的に様々な調整が長引き、Web サイトの公開は平成 25 年 9 月にまですれ込んでしまったものの、公開されたときの達成感は格別なものでした。おかげさまで、近頃、県内の復興関係者と話す機会に「『いわて復興だより』読んでいますよ！」と言われることが増えました。また、「いわて復興だより」をきっかけにした、人と人とのつながりも生まれました。

#### (2) 都の様々な復興支援の取組が追い風に

また、全般的な面では、東京都職員であるというだけで、好意的に対応していただける機会が多々あるように感じました。これは、現地へ多くの職員を派遣していることに加え、災害廃棄物（がれき）の広域処理での協力や、都営地下鉄での岩手県広報枠の無償提供等、都の各局による様々な復興支援の積み重ねのおかげだと思えます。復興のための取組が、我々派遣職員が活動する上での追い風になっていると感じました。



取材がきっかけで意見交換会の開催へとつながった「若手会議」の面々と



都による支援の一環として都営地下鉄に掲出された県の PR ポスター

## 4 今後の都政に活かせること・活かしたいこと

岩手県復興局に配属になった年度当初、配属先の上司からこんなことを言われました。

「復興局はできてからまだ2年しか経ってない若い組織。前例なんてあってないようなもの。どんどん意見を出してチャレンジしてほしい」

この言葉は、岩手県で様々な業務を行う上での励みになるとともに、都に戻ってから覚えておきたい言葉だと思いました。

ご存知のとおり、自然災害は常に我々の想定を超えてきます。もちろん、事前に十分な対策を講じておくことは基本ですが、想定外のことが起こったときにどうすればいいのか。これを考えておくこともまた大切なことです。私の出した答えは、「自分の頭で考え、周りの仲間・上司と相談し、物事を進めていく」という極々基本的な答えでした。このように単純でありながら意外と忘れがちなことを、岩手県で働く中で学べたように思います。

行政の仕事は、多かれ少なかれ定型的な仕事が付きまといまいます。そんな中、「とりあえず前例に踏襲する」という機械的な判断によるのではなく、「もし前例がなかったとしたら、その判断が最適なのかどうか」と少しでも考えることができたなら、今回の被災地派遣で得られた結果だと思えます。入都当初は、私もチャレンジ精神旺盛な職員だったはず。しかしながら、今思えば、年月が経つとともにその意欲も揺らぎ、目の前の仕事に追われ、固い頭になっていたように思います。

「復興」というほとんどの職員が初体験の仕事を、全員で知恵を出し合って進めていったという1年間は、とても1年間とは思えないほど濃密な時間であり、得るものの多い1年間でした。